*Bulletin of Tsukuba Developmental and Clinical Psychology, Vol.26 2015*

〔原著〕

# 中学生人気児・拒否児における関係性攻撃と心理社会的適応との関連

## —教師評定測度を用いた検討—

筑波大学人間系：濱口　佳和
東京成徳大学応用心理学部：渡部　雪子
筑波大学人間総合科学研究科：臼倉　瞳

Relationship between relational aggression and psychosocial adjustment in popular and rejected junior high school students: Examination by teacher rating scales

Yoshikazu Hamaguchi, Yukiko Watabe and Hitomi Usukura

### 問題と目的

平成23年に大津市の中学校で発生したいじめ自殺事件とその後の遺族による裁判が契機となり，我が国の子ども達のいじめの問題は，学校のみならず，教育委員会，警察などの対応の問題を含めた複合的な社会病理現象であることが改めて浮き彫りにされた。平成25年９月，いじめ防止対策推進法が施行されるに至り，我が国でもようやく子ども達のいじめの問題への対応・対策に関する法的根拠が整った。現在，我が国の教育現場におけるいじめに対する意識は高く，平成25年度の日本全国の小中高・特別支援学校における児童生徒間のいじめの発生認知件数は，２年前の７万231件を大幅に上回る18万5,803件となり，過去第２位の高い値を示している（文部科学省，2014)。折しも，教育心理学者達を中心に，学校における包括的な予防教育の機運が高まり，諸外国の取り組みとその成果が紹介されるとともに（山崎・戸田・渡辺，2013)，学校を挙げての大規模な教育プログラムの実践が開始されている（勝間・津田・山崎，2011)。これらの取り組みを通じて，いじめ被害者の救済のみならず，いじめを行う子どもの攻撃性の適正化が図られる必要がある。そのためには，我が国の子ども達の攻撃行動に関する科学的知見の蓄積が益々必要となっている。

世界的に見て，児童生徒間のいじめの手口で最も一般的なのは「悪口・からかい」の言語的攻撃であるが，欧米諸国に比べて我が国の児童生徒で多い手口が「無視・仲間はずれ」である（森田，2001)。我が国では欧米諸国に比較すると相互協調的自己観（interdependent self-construal, Markus & Kitayama, 1991）が優勢で，対人関係を重視する傾向にあるため，この様な手口による攻撃が子どもに与える影響はより深刻になりやすく（Kawabata, Crick, & Hamaguchi, 2013)，特に留意する必要がある。

Crick & Grotpeter（1995）は，「他者の仲間関係を故意に操作したり，損なうことによって，その人を傷つけること」を関係性攻撃（relational aggression）と呼び，集団からの排除，友情や受容の撤回，悪意ある噂の流布などをその具体的な形態とした。関係性攻撃は，人間関係を重視する人々にとって特に有害であるにも拘らず，非言語的な仕方や蔭で操作することも少なくないため，言語的攻撃や身体的攻撃より目立ちにくく（Bauman & Del Rio, 2006)，教師による介入が困難な攻撃行動である。特に中学生の時期には，子ども達の仲間関係が児童期よりも狭く，親密になるため（落合・佐藤，1996)，関係性攻撃は仲の良い友達関係の中で

発生しやすくなる。そのため，教師が日頃から学級内や部活動内部での生徒同士の仲間関係や仲間集団，仲間集団間の関係をよく把握しておくことが，効果的な予防と介入には不可欠である。

上記の必要を受け，渡部・濱口（2014）は，中学・高校の教師を対象に，教師評定用多次元性関係性攻撃尺度（中高生版：MRAS-JST）を作成した。これは2因子構造で，無視，社会的排除，接触の意図的回避などを含む「関係拒否」下位尺度と「噂の流布」下位尺度から構成される9項目5段階評定の尺度である。2つの下位尺度はともに高い内的一貫性を示しているが，妥当性の検討は未着手である。中学校の関係性攻撃への効果的な介入のためにも，関係性攻撃の信頼性と妥当性を兼ね備えた教師評定尺度の完成が望まれる。

ところで，従来，関係性攻撃については児童の心理社会的適応との関連を中心に多くの研究が行われており，以下の知見が明らかにされてきた。①小学校中・高学年の時点で既に，関係性攻撃には時間的安定性がある（Crick & Grotpeter, 1995; Werner & Crick, 2004），②関係性攻撃は仲間による受容とは負，仲間による拒否とは正の関連がある（Crick & Grotpeter, 1995），③関係性攻撃は，普通児よりも拒否児と敵味方児の方が多く行う（Crick & Grotpeter, 1995; Tomada & Schneider, 1997），④関係性攻撃は仲間からの孤立感，抑うつ・不安等の内在化問題と正の関連がある（Crick & Grotpeter, 1995; Kawabata, Crick, & Hamaguchi, 2010），⑤小学3年生の時点で関係性攻撃を多く行う子どもは，1年後，ひきこもりや非行傾向が強くなる（Crick, Ostrov, & Werner, 2006），⑥関係性攻撃は社会的情報処理によって規定される（Crick, 1995; Crick & Werner, 1998）。この様に，関係性攻撃の概念の提唱者であるN.R.Crickとその弟子や共同研究者の諸研究では，既に児童期において，関係性攻撃は個人内で安定した行動傾向であり，行為者自身の仲間関係や心理社会的適応を損なう，介入を要する有害な行動であることが示されてきた。

しかし近年，思春期の子どもの関係性攻撃と社会的適応との関連について，児童期を中心に見出された従来の知見とは異なる事実が明らかにされてきた。これには，仲間内の社会的地位に関する新しい測定法の開発が関係している。Crickらの研究では，仲間内での人気の測度として，ソシオメトリック・テストの肯定的指名・否定的指名に基づく測度と地位類型が用いられていたが（Coie, Dodge, & Coppotelli, 1982），これに加えて最近は，「知覚された人気度（perceived popularity）」が使用されるようになってきた。これは，児童生徒に，自分の所属している学級（学年）で，「最も人気のある子ども」と「最も不人気な子ども」をそれぞれ指名させ，子どもごとに仲間からの被指名数（率）を算出する測度である。この測度で高得点となる子どもは，「仲間内で人気が最もある」と仲間達が思っている子どもを意味しており，その子どもが実際に仲間から好かれているとは限らない。これに対して，ソシオメトリック・テストによる，従来の社会的選好（social preference）得点は，仲間からの肯定的被指名数・否定的被指名数を基に計算されており，現実に仲間から好かれることが多く，嫌われることが少ないこと意味する測度である。「知覚された人気度」を用いた思春期の子どもの研究では，仲間内での人気と関係性攻撃の間に，従来の知見とは反対に正の関連を示す研究が散見される。たとえば，Ryan & Shim（2008）は，仲間内での人気の獲得に価値を置き，人気を得ることを目標とする傾向の強い青年ほど，関係性攻撃を行いやすいことを見出している。一方，Puckett, Aikins, & Cillessen（2008）は，中学1年生を対象とした1年間の縦断的研究で，関係性攻撃の多さと知覚された人気度との正の関連が，社会的自己効力の高さや仲間の社交性の高さによって調整されることを見出している。これはすなわち，関係性攻撃を多く行う者でも，社会的自己効力が高い，あるいは仲間の社交性が高い生徒の場合は，知覚された人気度が高まるが，逆にこれの調整変数が低い生徒の場合は，知覚された人気度が低くなることを意味している。「知覚さ

れた人気度」と関係性攻撃との関連を検討した上述の諸研究は，いわゆる「クラスの人気者」の中には，実質的に仲間から好かれている従来の「人気児」だけでなく，多様なソーシャル・スキルを駆使しつつ，関係性攻撃をも用いて人気を獲得・維持している者が含まれていることを示唆している。関係性攻撃は他者を傷つける行為なので，それを行う者には仲間からの実質的な拒否・受容の低下のリスクが常につきまとう。そのため，たとえ「クラスの人気者」であっても，関係性攻撃を行う以上，心理社会的不適応を何らかの仕方で損なう可能性がある。そこで本研究の第２の目的として，中学生の人気児において，仲間に対する関係性攻撃とその生徒自身の心理社会的不適応との間にどのような関連があるかを明らかにすることを目的とする。また比較のために，仲間から拒否される不人気な生徒における関係性攻撃と心理社会的不適応との関連も合わせて検討する。

先述したとおり，中学校の教師にとって，生徒間で行われている関係性攻撃に対する感受性の高さは，いじめの効果的な予防や対処にとって重要な職能である。そこで，担任教師が生徒の関係性攻撃と心理社会的適応との間にどのような関連を見出しているのか教師自身の認識を明らかにすることは，教育実践上も重要な意義がある。そのため，本研究では特に，中学校の教師が認知する生徒の関係性攻撃に焦点を当て，それが生徒達の心理社会的適応とどのような関連を示すのかを検討することとする。

## 方　　法

### 調査対象者

株式会社 NTT レゾナンスの goo リサーチにモニター登録をしている中学校教員の中から，自発的に参加協力した107名が対象者となった。そのうち，教示の読み間違いなどで標的生徒の選択を誤った（人気児と拒否児で異なる学年の生徒を選んだ）対象者の回答22名分を除外した85名（男性63名，女性22名）について分析を行った。年代の内訳は20代・30代16名，40代35名，50代33名，60代１名であり，40，50代が多かった。平均年齢は46.5歳であった。勤務地は北海道から九州まで広域に分布した（北海道６，東北６，関東28，中部16，近畿12，中国４，四国４，九州・沖縄９）。

### 調査時期

2012年２月に実施した。

### 実施手続き

調査対象者には，今年度受け持った学級の生徒達の中から，a.「多くの仲間から好かれ，その生徒を嫌う仲間は殆どいない生徒（人気児）」を一人思い浮かべさせ，その生徒の性別，学年を回答させた後，後述の教師評定用多次元性関係性攻撃尺度（中高生版），CBCL-TRF，子どもの社会的行動評定尺度（CSBST, Crick & Grotpeter, 1995）でその生徒の普段の行動の評定を求めた。引き続き，a の生徒と同じ学級の生徒の中から，b.「何人もの仲間から嫌われ，その生徒を好む仲間が殆どいないかった生徒（拒否児）」を一人，思い浮かべさせ，a 同様の内容の質問に回答を求めた。

### 調査内容

#### （１）教師評定用多次元性関係性攻撃尺度（中高生版）

渡部・濱口（2014）の尺度である（Multidimensional Relational Aggression Scales for Junior & Senior high school Teacher rating form: MRAS-JST）。２つの下位尺度から成る。関係拒否６項目（「自分がきらいな人が来たら，他の人をさそって別の場所に行く」など），噂の流布３項目（「友だちについて 人から聞いたよくないうわさを 広める」など）の合計９項目を使用。担任教師が対象の生徒を，「まったくあてはまらない（１）」，「あまりあてはまらない（２）」，「どちらとも言えない（３）」，「少しあてはまる（４）」，「よくあてはまる（５）」の５段階で評定した。

#### （２）CBCL-TRF

Achenbach（1991）によって開発された 'Teacher Report Form of the Child Behavior Check List' の日本語翻訳版を使用した。項目数が多いため，抑うつ・不安尺度18項目から

特に抑うつの症状を示唆する7項目（「ひとりぼっちで寂しいとこぼす」，「誰も大切に思ってくれないと感じたり・こぼしたりする」など）と，中学生にも見られる非行的行動尺度9項目（「やってはいけない事をした後でも悪いとは思わないようだ」，「悪いことをする子達とたむろする」など）を抜粋した。評定対象の生徒の過去2ヶ月の状態について，「あてはまらない（0）」「やや・時々あてはまる（1）」，「たいへん・よくあてはまる（2）」の3段階評定で評定してもらった。

（3）子どもの社会的行動評定尺度

Crick & Grotpeter（1995）の'Children's Social Behavior Scales for Teachers'（CSBST）の日本語翻訳版。3つの下位尺度から成る。向社会的行動尺度6項目（「この生徒は仲間によく拒否される子をかわいそうに思い，助けてあげようとする」，「この生徒は，仲間グループの活動や遊びのリーダーによくなる」など），顕在性攻撃尺度4項目（「この生徒は仲間を叩いたり，蹴ったりする」，「この生徒は，仲間を押したり，突き飛ばしたりする」など），関係性攻撃尺度5項目（「この生徒がある仲間に腹を立てている時，その仲間を仲良しグループや遊びグループから仲間はずれにして仕返しをする」，「この生徒は仲間のよくない噂や陰口を広める」など）を使用。担任教師により評定対象の生徒について5段階評定してもらった（「ぜんぜんそうでない（1）」，「たまにそう（2）」，「ときどきそう（3）」，「だいたいそう（4）」，「いつもそう（5）」）。

## 結　果

（1）尺度の信頼性

本研究で使用したMRAS-JST，CBCL-TRF，CSBSTのすべての下位尺度について，地位類型ごと（人気児と拒否児）にα係数を算出し，信頼性を確認した（Table 1）。全ての下位尺度に亘って.80～.99というα係数が示され，高い信頼性が確認された。

（2）MRS-JSTの併存的妥当性の検討

MRS-JSTの2下位度と尺度全体の合計得点の併存的妥当性を検討するために，CSBSTの関係性攻撃尺度，顕在性攻撃尺度，向社会的行動尺度との相関係数を地位類型ごとに算出した。Table 2に示す様に，人気児においても拒否児においてもMRAS-JSTの2つの下位尺度と合計得点はともにCSBSTの関係性攻撃と正の有意相関が見られ，併存的妥当性が確認された。特に拒否児においては相関係数の値が.73～.77と極めて高く，十分な併存的妥当性があることが示された。顕在性攻撃とは人気児・拒否児ともに中程度の相関が見られた。向社会的行動とは人気児においてのみ負の有意な相関が見られた。

（3）地位類型間の社会的行動と適応指標の差異

MRAS-JST，CSBST，CBCL-TRFの全ての下位尺度について評定対象間，すなわち人気児と拒否児間の平均値に差があるかを検討するために，対応のある$t$検定を行った。結果をTable 3に示す。CSBSTの向社会的行動では拒否児よりも人気児の方が有意に高かったが，それ以外，すなわちMRAS-JSTの関係拒否と噂の流布，CSBSTの顕在性攻撃と関係性攻撃，CBCL-TRFの抑うつ・不安と非行的行動の全てで，人気児よりも拒否児の方が有意に高かった。

（4）仲間への社会的行動と心理社会的適応との関連についての人気児・拒否児別の検討

人気児・拒否児それぞれの地位類型におい

Table 1　使用した尺度の信頼性

| 尺度 | | 人気児 | 拒否児 |
|---|---|---|---|
| MRAS-JST | 合計 | .96 | .98 |
| | 関係拒否 | .95 | .96 |
| | 噂の流布 | .97 | .99 |
| CBCL-TRF | | | |
| | 不安・抑うつ | .80 | .86 |
| | 非行的行動 | .91 | .89 |
| CSBST | | | |
| | 関係性攻撃 | .98 | .96 |
| | 顕在性攻撃 | .94 | .95 |
| | 向社会的行動 | .90 | .87 |

て，2種類の関係性攻撃，向社会的行動，顕在性攻撃といった仲間への社会的行動が，抑うつ・不安ならびに非行的行動に示す関連を検討するために，重回帰分析を行った。4つの仲間への社会的行動の下位尺度を説明変数とし，CBCL-TRFの抑うつ・不安下位尺度と非行的行動をそれぞれ基準変数とする重回帰分析を実施した（Table 4）。

人気児の場合，不安・抑うつでは重相関係数は.43，非行的行動では.62といずれも高く，有意であった。顕在性攻撃が不安・抑うつおよび非行的行動と正の関連が見られる一方，関係拒否は不安・抑うつと，噂流布は非行的行動と正の関連が見られた。

拒否児の場合，不安・抑うつについては，重相関係数は有意ではあるが低い値を示したに過ぎなかった。しかしながら，非行的行動では極めて高い重相関係数が見られた。不安・抑うつでは，向社会的行動が正の関連を示し，非行的行動とは噂流布と顕在性攻撃が比較的強い正の関連を示した。抑うつ・不安と関係性攻撃の間には有意な関連が見られなかった。

以上の様に，中学生では教師が判断した人気児の場合も拒否児の場合もともに，非行的行動

Table 2　MRS-JSTの併存的妥当性

| MRAS-JST/CSBST | 人気児 | | | 拒否児 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 関係性攻撃 | 顕在性攻撃 | 向社会的行動 | 関係性攻撃 | 顕在性攻撃 | 向社会的行動 |
| 関係拒否 | .36*** | .35*** | −.46*** | .75*** | .43*** | .04 *n.s.* |
| 噂流布 | .39*** | .42*** | −.39*** | .73*** | .45*** | .03 *n.s.* |
| 合計 | .38*** | .39*** | −.45*** | .77*** | .45*** | .04 *n.s.* |

*** $p<.001$

Table 3　各尺度における人気児と拒否児の差

| 尺度名 | 人気児 | | 拒否児 | | $t$値 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 平均値 | 標準偏差 | 平均値 | 標準偏差 | ($df=84$) |
| MRAS-JST（関係拒否） | 9.13 | 3.95 | 17.41 | 7.67 | 8.71*** |
| MRAS-JST（噂の流布） | 4.11 | 1.86 | 8.08 | 4.28 | 7.83*** |
| CBCL-TRF（抑うつ・不安） | 7.93 | 1.61 | 10.79 | 3.34 | 7.69*** |
| CBCL-TRF（非行的行動） | 9.71 | 2.00 | 14.20 | 4.84 | 8.43*** |
| CSBST（向社会的行動） | 19.08 | 6.14 | 9.32 | 4.20 | 13.06*** |
| CSBST（関係性攻撃） | 6.29 | 3.21 | 10.05 | 5.76 | 5.72*** |
| CSBST（顕在性攻撃） | 4.88 | 2.60 | 6.68 | 4.32 | 3.83*** |

*** $p<.001$

Table 4　仲間への社会的行動から抑うつ・不安ならびに反社会的行動傾向へ重回帰分析結果

| | 人気児 | | | | 拒否児 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 抑うつ・不安 | | 非行的行動 | | 抑うつ・不安 | | 非行的行動 | |
| | $\beta$ | $r$ | $\beta$ | $r$ | $\beta$ | $r$ | $\beta$ | $r$ |
| 関係拒否 | .30** | .37*** | .29† | .56*** | .08 | .09 | −.03 | .57*** |
| 噂の流布 | −.25 | .27** | .45*** | .56*** | .13 | .14 | .40*** | .64*** |
| 向社会的行動 | .17 | −.00 | .07 | −.11 | .28** | .28 | .01 | .14† |
| 顕在性攻撃 | .22* | .33*** | .28** | .47*** | −.02 | .04 | .53*** | .71*** |
| $R$ | .43*** | | .62*** | | .28** | | .79*** | |
| | $F(2,82)=9.14$ | | $F(2,82)=25.34$ | | $F(1,83)=7.01$ | | $F(2,82)82=69.70$ | |
| $R^2$ | .18 | | .38 | | .08 | | .62 | |

関係拒否と噂の流布はMRAS-JSTの下位尺度。向社会的行動，顕在性攻撃はCSBSTの下位尺度。
† $p<.10$，* $p<.05$，** $p<.01$，*** $p<.001$

と一貫して有意な関連がある関係性攻撃は，排除・無視ではなく，陰でよくない噂を広める行動であることが明らかにされた。

## 考　　察

本研究は，渡部・濱口（2014）によって開発された教師評定の中高生用多次元性関係性攻撃尺度（MRAS-JST）の妥当性の検討と，教師が認知した中学生の人気児と拒否児において，関係性攻撃と心理社会的適応との関連性を検討することが目的とされた。

### （1）妥当性の検討

MRAS-JSTの併存的妥当性はCSBSTの関係性攻撃，顕在性攻撃，向社会的行動との相関によって検討された。人気児においても拒否児においても，MRAS-JSTの関係拒否と噂の流布の2下位尺度及び合計得点はCSBSTの関係性攻撃尺度と正の有意相関が見られ，併存的妥当性が支持された。特に拒否児において相関係数は.73～.77と高く，教師が仲間から拒否されている生徒の関係性攻撃を評定する際にMRAS-JSTとCSBSTの両測度がきわめて類似した行動傾向を測定していることが示された。人気児の場合，両測度の相関係数は.36～.39と控えめな値にとどまっている。Table 3に示す様に，拒否児の場合と比べ，尺度の得点分布が全体的に低く，標準偏差が小さいため，両測度の相関が高くならなかったものと思われる。顕在性攻撃とは，人気児で.35～.42，拒否児で.43～.45となった。児童を対象とした教師評定用の多次元性関係性攻撃尺度（MRAS-ET：桑原・関口・濱口，2014）では，顕在性攻撃と関係性攻撃各尺度との相関は人気児で.33～.38，拒否児で.33～.36であった。仲間指名測度を用いたCrick & Grotpeter（1995）では，関係性攻撃と顕在性攻撃の相関は.54であった。この様に，先行研究では，教師評定でも仲間指名でも，関係性攻撃と顕在性攻撃には中程度の正の相関が見られており，本研究の結果もほぼ一致している。形態は異なるが他者を意図的に傷つける行動である点では一致しており，中程度の正の相関があることは理論的にも妥当な結果と思われる。この点からもMRAS-JSTの併存的妥当性が支持されたと言えよう。向社会的行動とは負の関連が予想されたが，人気児において－.39～－.46の中程度の有意相関が見られただけで，拒否児においては負の相関は見られなかった。Table 3に示す様に，拒否児は人気児に比べると，元来向社会的行動の平均値が低く，標準偏差も小さい。一方で関係性攻撃の平均値は高く，標準偏差は大きい。こういった分布の特性が，両測度間の相関を抑制しているのかもしれない。以上に見た様に，併存的妥当性のエビデンスも示されているが，今後は人気児も拒否児も含んだより大きなサンプルでの妥当性検討が望まれる。

### （2）社会的地位類型による差の検討

全ての測度について，人気児と拒否児との間の平均値の差を対応のある$t$検定で検討したところ，全ての測度において有意な社会的地位類型の差が見られた。CSBSTの向社会的行動は人気児の方が高かったが，MRAS-JSTの2下位尺度，CSBSTの顕在性攻撃と関係性攻撃，CBCL-TRFの抑うつ・不安と非行的行動については全て人気児よりも拒否児の方が高かった。これらの結果は，社会的地位類型の測度も社会的行動の測度も，ともに仲間指名と教師評定の相違があっても，先行研究と一致しており（Coie et al., 1982; Crick & Grotpeter, 1995；前田，1995），測度の違いを越えて一貫した結果と言えよう。

### （3）人気児・不人気児における関係性攻撃と心理社会的適応との関連の検討

MRAS-JSTの関係拒否と噂の流布，CSBSTの顕在性攻撃と向社会的行動を独立変数，CBCL-TRFの抑うつ・不安と非行的行動をそれぞれ従属変数とする重回帰分析を人気児と拒否児別に行った。その結果，人気児では，抑うつ・不安に対して顕在性攻撃と関係拒否が正の関連を示し，非行的行動については顕在性攻撃と噂の流布が正の関連を示した。顕在性攻撃を統制してもなお，関係性攻撃の独自の寄与が認められた。中学校の教師が，多くの仲間から好かれていると認知している人気児の場合でも，関係性攻撃を多く行う生徒ほど，抑うつ・不安や

非行的行動といった心理社会的不適応傾向が強まることが明らかになった。従来の研究では，関係性攻撃は内在化問題や外在化問題と正の関連があることが既に知られており，（Crick & Grotpeter, 1995; Crick et al., 2006; Kawabata et al., 2010），本研究の結果は，対象年齢が中学生，測定方法が教師評定であっても，一般化可能性のある知見であると言えよう。

重回帰分析の結果，抑うつ・不安傾向については，拒否児の場合は向社会的行動が多いほど高まるという結果であったが，人気児の場合は，関係性攻撃の中でも，特に関係拒否が多いほど抑うつ・不安傾向が高まることが示された。拒否児は仲間から好かれることが少なく，嫌われることが多い社会的地位である。この様な地位にいる生徒が向社会的行動を行ったとしても，相手に受け入れられなかったり，受け入れられたとしても，相手からの返報がない可能性がある。そうした場合には，向社会的行動を多く行う程，報われず，結果として抑うつ・不安傾向が高まるものと思われる。一方，人気児の場合，関係拒否を行う程，抑うつ・不安傾向が高まるという結果であった。関係拒否は，自分が嫌いな人物に対する無視，社会的排除，関係の回避である。人気児は他者から好かれることが多い故に，自分が好きでない相手から好意を持たれ，接近されることもあり得る。そうなった時に，その人物との関わりをなくす目的で関係拒否の諸行動をとるものと考えられる。人気児で関係拒否行動が多いことは，こうした葛藤を経験する頻度の多さや継続性を示唆しており，こうした葛藤経験のために抑うつ・不安傾向が高まるものと推察される。また，無視や排除という行為は単に相手との接触を最小限にする対処方略だけでなく，相手を傷つける嫌悪的な行為である（Crick & Grotpeter, 1995）。従って，その被害者はもちろん，その行為に加担させられたり，目撃した生徒達にとっても不快な出来事である。人気児といえども，仲間集団内で，周囲を巻き込みながら関係拒否を多く行うほど，その行為の嫌悪性ゆえに，相手を含め周囲の生徒達から拒否されやすくなり，その為，抑うつ傾向や不安傾向が高まると考えられる。職場の関係性攻撃と加害者の心理的ストレスとの関連を検討した関口・濱口（2012）では，関係性攻撃加害経験が，周囲による被受容感の低さ・被拒否感の高さによって媒介されて，心理的ストレス反応を高める結果を得ている。こうしたメカニズムが中学生の人気児でも働いている可能性もある。

重回帰分析の結果，非行的行動については人気児・拒否児ともに，顕在性攻撃の多さに加えて噂の流布を多く行うほど非行的行動が増加するという結果が得られた。今回取り上げたCBCL-TRFの非行的行動の項目は，嘘，怠学，飲酒・物質使用，「悪いことをしても反省しない」などの行動であった。顕在性攻撃は身体的攻撃と言語的攻撃から成る攻撃行動で，これを多く行う者ほど反社会性が高まるのは当然の結果と言えよう。一方，噂の流布は，攻撃行動の形態としては顕在性攻撃より穏やかで目立ちにくい。しかしながらこれは，自ら進んで仲間のよくない噂を広める行為であり，関係拒否よりは積極的な関係性攻撃である。職場での社会人による関係性攻撃の研究では，噂の流布に対応する行動（陰口・噂）は，男女とも一次性・二次性サイコパシー傾向と有意な関連があり，利己的で，対人操作的で，共感性が低く，衝動的な行動であることが明らかにされている（桑原・濱口，2012）。従って，人気児でも拒否児でも，こうした性質の行動をより多く行う程，反社会的な行動傾向がより強まるものと思われる。

Ryan & Shim（2008）やPuckett et al.（2008）の研究では，仲間内での人気度が高い子どもの中にも関係性攻撃を多く行う子どもの存在が示されている。以上に見たように，本研究においても人気児の中にも関係性攻撃を多く行う者がいることが確認され。本研究ではさらに，無視や集団からの排除，関係を回避する傾向が強い人気児ほど，抑うつ・不安傾向が強くなるほか，仲間の噂を積極的に流布する傾向が強い人気児ほど，非行的行動傾向が強まるという様に，関係性攻撃の種類によって人気児の心理社

会的不適応に異なった影響を与えることが示唆された。この点は新たな知見と言えよう。

（4）今後の課題

本研究は中学生の関係性攻撃を測定する多次元性の教師評定尺度であるMRAS-JSTの妥当性の検討と，教師によって知覚された中学生の人気児において，関係性攻撃と心理社会的適応との関連を検討することを目的として行われた。

妥当性の検討は，本研究では教師が挙げた人気児と拒否児のそれぞれについて，類似の社会的行動の教師評定尺度であるCSBSTの下位尺度との相関を検討する方法を取った。一定の併存的妥当性が示されたが，今後は，①評定対象である生徒の人気度は特に指定せず，受け持ちの生徒をランダムに抽出して評定させ，CSBST各下位尺度との関連を検討する，②自己報告や仲間指名など他の種類の測度を用いて関係性攻撃の個人差を測定し，関連を検討するといったことが課題である。

教師が知覚した人気度による関係性攻撃の心理社会的適応に対する関連の検討について，本研究では，人気児といえども関係性攻撃を行うことが心理社会的不適応を引き起こすこと，そして，関係拒否が抑うつ・不安傾向を高め，噂の流布が非行的行動傾向を促進することを示唆する結果が得られた。これは非常に興味深い知見であるが，①心理社会的不適応の測度を生徒の自己報告（特に抑うつ・不安の様な内在化問題）や仲間指名（行動傾向など）といった測度によって測定して検討する，②同時に仲間が知覚した人気度も測定し，教師の知覚による場合との異同を検討することなどが課題として残されている。

## 引用文献


Achenbach, T. M. (1991). *Manual for Teacher's Report Form and 1991 Profile.* Burlington, VT: University of VT, Department of Psychiatry.

Bauman, S., & Del Rio, A. (2006). Preservice teachers' responses to bullying scenarios: Comparing physical, verbal, and relational bullying. *Journal of Educational Psychology*, 98, 219-231.

Coie, J. D., Dodge, K. A., & Coppotelli, H.(1982). Dimensions and types of social status: A cross-age perspective. *Developmental Psychology*, 18, 557-570.

Crick, N. R. (1995). Relational aggression: The role of intent attributions, feelings of distress, and provocation type. *Development and Psychopathology*, 7, 313-322.

Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.

Crick, N. R., Ostrov, J. M., & Werner, N. E. (2006). A longitudinal study of relational aggression, physical aggression, and children's social-psychological adjustment. *Journal of Abnormal Psychology*, 34, 131-142.

Crick, N.R., & Werner, N. E. (1998). Response decision processes in relational and overt aggression. *Child Development*, 69, 1630-1639.

勝間理沙・津田麻美・山崎勝之（2011）．学校におけるいじめ予防を目的としたユニバーサル予防教育：教育目標の構成とそのエビデンス　鳴門教育大学研究紀要，26，171-185.

Kawabata, Y., Crick, N.R., & Hamaguchi, Y. (2010). The Role of culture in relational aggression: associations with social-psychological adjustment problems among Japanese and U.S. school-aged children. *International Journal of Behavioral Development*, on, 13, 354-362

Kawabata, Y., Crick, N.R., & Hamaguchi, Y. (2013). The association of relational and physical victimization with hostile attribution bias, emotional distress, and depressive symptoms: A cross-cultural study. *Asian Journal of Social Psychology*, 16, 260-270.

桑原千明・濱口佳和（2012）．関係性攻撃と心理社会的適応との関連（17）－自己愛・反応的攻撃性・サイコパシー傾向と職場の関係性攻

撃との関連－　日本教育心理学会第54回総会発表論文集，275.
桑原千明・関口雄一・濱口佳和（2014）．多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版）の作成　筑波大学発達臨床心理学研究，**24**，27-34.
前田健一（1995）．児童期の仲間関係と孤独感：攻撃性，引っ込み思案および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚　教育心理学研究，**43**，156-166.
Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
文部科学省（2014）．児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査　平成25年度訂正値　2014年12月19日公表（http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid＝000001055973&cycode＝0）
森田洋司（2001）．いじめの国際比較研究－日本・イギリス・オランダ・ノルウェーの調査分析　金子書房
落合良行・佐藤有耕（1996）．青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究，**44**，55-65.
Puckett, M. B., Aikins, J., W., & Cillessen, A. H. N. (2008). Moderators of the association between relational aggression and perceived popularity. *Aggressive Behavior,* **34**, 563-576.
Ryan, A. M., & Shim, S.S. (2008). An exploration of young adolescents' social achievement goals and social adjustment in middle school. *Journal of Educational Psychology*, **100**, 672-687.
関口雄一・濱口佳和（2012）．関係性攻撃と心理社会的適応との関連（18）－職場の関係性攻撃とストレス反応との関連－　日本カウンセリング学会第45回大会発表論文集，89.
Tomada, G., & Schneider, B. (1997). Relational aggression, gender, and peer acceptance: Invariance among informants. *Developmental Psychology,* **33**, 601-609.
渡部雪子・濱口佳和（2014）．教師評定用多次元性関係性攻撃尺度（中高生版）の作成　筑波大学発達臨床心理学研究，**25**，21-32.
Werner, N. E., & Crick, N.R. (2004). Maladaptive peer relationships and the development of relational and physical aggression during middle childhood. *Social Development,* **13**, 495-514.
山崎勝之・戸田有一・渡辺弥生（2013）．世界の学校予防教育　金子書房